

数寄の楽人

1 中ごろ、市正時光といふ笙吹きありけり。茂光といふ箏築師と囲碁を打ちて、同じ声に裏頭楽を唱歌にしけるが、おもしろくおぼえけるほどに、内よりとみのことにて時光を召しけり。

御使ひ至りて、このよしを言ふに、いかにも、耳にも聞き入れず、ただもろともに揺るぎ合ひて、ともかくも申さざりければ、御使ひ、帰り参りて、このよしをありのままにぞ申す。いかなる御戒めかあらむと思ふほどに、「いとあはれなる者どもかな。さほどに楽に愛でて、何ごとも忘るばかり思ふらむこそ、いとやむごとなけれ。王位は口惜しきものなりけり。行きてもえ聞かぬこと」とて、涙ぐみ給へりければ、思ひのほかになむありける。

これらを思へば、この世のこと思ひ捨てむことも、数寄はことにたより

1 中ごろ そう遠くない昔。

2 市正 都の市をつかさどる役所の長官のこと。

3 時光 豊原時光。生没年未詳。十一世紀後半頃の人。笙の名手と伝えられる。笙吹き 笙の演奏家。「笙」は雅楽で用いる管楽器の一種。



笙

5 茂光 和邇部茂光。生没年未詳。箏築師の名手と伝えられる。

6 箏築師 箏築の演奏家。「箏築」は雅楽で用いる縦笛。



箏築

7 同じ声に 声を合わせて。

8 裏頭楽 雅楽の曲名。

9 唱歌 音楽の旋律を口で唱えること。
10 揺るぎ合ひて 互いに体を揺り動かして。

11 数寄 好きな道に没入すること。

10

5

となりぬべし。

『発心集』

おぼゆ とみ 召す いと
やむごとなし え



笙と箏の演奏『発心集』

◆ 発心集

説話集。編者は鴨長明（一一一五？—一二一六）。鎌倉時代初期（十三世紀初め）に成立。出家、遁世、往生についての仏教説話を約百話収める。本文は『新潮日本古典集成』によった。

学習の手引き

1 「涙ぐみ給へりければ」(二八・9)、「思ひのほかになむありける」(二八・9)は、それぞれ誰のどのような気持ちを表しているか。

2 「この世のこと思ひ捨てむことも、数寄はことにたよるとなりぬべし」(二八・11)とは、どういうことか。

語句と表現

1 本文中から係り結びを抜き出そう。

係り結び

「ぞ」「こそ」などの特定の助詞が文中に置かれた場合、その結びの部分は終止形ではなく、連体形または已然形になる。これを係り結びといい、強意や疑問・反語の意を表す。

連体形

❖ かかる道は、いかでかいまする。〔四七・12〕

〔疑問〕

連体形

❖ 頼まぬものの恋ひつつぞよ経る〔五二・3〕

〔強意〕

連体形

❖ 思ひのほかになむありける。〔一八・9〕

〔強意〕

已然形

❖ 何ごとも忘るばかり思ふらむこそ、いとやむごとなけれ。

〔強意〕

〔一八・7〕

助詞	結び	意味
や・か	連体形で結ぶ。	疑問・反語
ぞ・なむ		
こそ	已然形で結ぶ。	強意

仮定条件と確定条件

現代文で「花が咲けば」といえば、「咲け」が仮定形であるので「もし花が咲くならば」という仮定条件を表す。

古文では、「花咲けば」の「咲け」は已然形であるため、「花が咲くので」「花が咲くと」という確定条件を表す。古文で仮定条件を表す場合は、「花咲かば」のように、未然形を用いる。

未然形 + ば ↓ 仮定条件 (もし…ならば)
 已然形 + ば ↓ 確定条件 (…ので…と)

* 「ば」は助詞。

❖ 仏だによく書き奉らば〔一二三・2〕

〔仮定条件〕

〔こにかく〕 仏さえ上手に描き申し上げたならば

❖ ともかくも申さざりければ〔一八・5〕

〔確定条件〕

〔なんとも申し上げなかつたので〕

❖ 見れば、すでにわが家に移りて〔一二二・5〕

〔確定条件〕

〔見ると、(火は)もう我が家に移って〕